

二〇一五年六月五日 開催 〈本学英米語学科 共催〉

アメリカ政治の中の討論／ディベート

セオドア・シエッケルス

(執筆 田島慎朗)

■ 講演者……セオドア・シエッケルス(ランドルフ・メイコン大学教授)

■ 司 会……田島慎朗(本学国際コミュニケーション学科講師)

■ 使用言語……英語

はじめに

以下は、二〇一五年度の日米交歓ディベートツアー・日本ツアーのイベントの一つとして行われた、ランドルフ・メイコン大学のセオドア・シエッケルス(Theodore F. Shekels)教授の講演である(イベントについては『日米交歓ディベート報告』八一頁を参照)。アメリカ政治の中の討論／ディベート(Debate in US Politics)と題されたこの講演では、大きくわけて三つのことについて話された。まず初めに大統領候補の

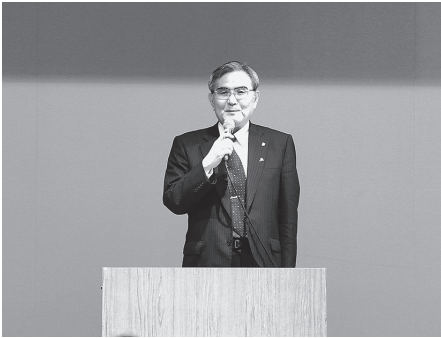
ディベートについて、続いて二つ目に米国連邦政府のディベートについて、そして最後にこれらのディベートと教育ディベートとのかかわりについてである。ここでは順に内容の要旨を記載する。まとめでは、会場から寄せられた質問の抜粋と、それに返答するシエッケルス教授のコメントを記載する。

大統領ディベートの経緯

みなさんの中には、アメリカ政治を良く知っている人もいるでしょう。たとえば、ジョン・F・ケネディ大統領などとはみなさん良く知っているだろうと思います。しかし、大統領予備選挙(Primary election)の代議員についてはそれほど多くの日本人の知るどころではないでしょう。なので、出来る限りみなさんに分かりやすい形でこれからの話を進めていき



セオドア・シェッケルス氏



開会の辞を述べる酒井邦弥学長

たいと思います。

リンカーン・ダグラス・ディベートを知っている人はどれくらいいるでしょうか。これを私の学校の学生に聞くと、ほとんどの学生が知っていると答えます。その中の半分ほどが、これを大統領候補が最初に行ったディベートとして記憶していますが、実はそれは本当のところではありません。エイブラハム・リンカーンとステイブン・ダグラスが行ったこの有名なディベートは、彼らが上院議員の候補者だった時に行ったものです。各地を周り、当時重要だった議題に関して

四時間ほどの一般大衆向けのディベート・セッションを行いました。

それからしばらく経って、一九六四年の大統領選にケネディが再び大統領候補となった時、対抗馬は共和党上院議員のバリー・ゴールドウォーターになる予定でした。しかし、みなさんご存じのとおり、ケネディ大統領は一九六三年に暗殺されてしまい、このディベートはかないませんでした。ですので、その直前の一九六〇年のケネディ・ニクソンの大統領ディベートについて話すことにしましょう。

このディベートに関して良く言われることの一つに、ラジオではニクソンが勝ち、テレビではケネディが勝ったというものがあります。実はこの主張が導き出されたのは、少々誤謬のある可能性の研究からなのですが、それでもなお、このディベートはニクソンがラジオの聴取者に独自に持っていたものと、ケネディがテレビ視聴者に持っていたものを示唆するところはあります。それは、まず、ニクソンはひどい風邪をこじらせていたということです。熱があつて、顔は青白く、おそらく汗をかいていたでしょう。ケネディはほどよく日焼けしていて、リラックスした様子でした。こうした要因が、見た目に大きな違いをもたらしました。二つ目に、ディベートに対する準備の仕方です。ニクソンはあまり準備をしませんでした。対してケネディは練習を積み、質問への対策を考えていました。

ただ、最も重要なのは、彼らの大統領ディベートに対する考え方の違いにあるでしょう。ニクソンは、これを「ディベート」だと考えていました。彼は大学生の時ディベートクラブに入っていて、上手に議論のやりとりを行うことが出来ました。したがって、彼はその延長線上にこのイベントを考えていました。それに対して、ケネディ陣営はこれをテレビショーの一つだととらえました。この違いが、私たちが今も知るケネディの「結果」に結び付いているのでしょうか。

一九六四年から一九七二年まで、ジョンソン大統領からニクソン大統領までの期間、大統領ディベートは行われませんでした。したがって、次に大統領候補がディベートをしたのは、ジミー・カーターとジェラルド・フォードが行った一九七六年の大統領選挙の時です。フォードはその時在任の大統領だったわけですが、彼はディベートをやつたらいいじゃないかという意見だったため、ディベートが実現しました。それ以後は、二人もしくはそれ以上の大統領候補の間でのディベートが行われてきたわけです。

さて、このようなディベートには、はじめのうちは、テレビコメンテーターやディベート部のコーチから様々な批判がされてきました。その大きな部分は、ディベートで厳密な論理に基づいた議論展開や審査がされないことからくるものです。元カンザス大学 (University of Kansas)、現セントルイス大学 (Saint Louis University) のコミュニケーション研究者のダイアナ・カーリン (Diana Carlin) 氏によると、無意味なところでの議論の衝突を起こしたディベートが多くあったようです。しかし、カーリン氏は同時に、そこからいくつかの重要な点を提言しています。まず、一つ目に、中立の市民は、ディベートの印象でどの政党に投票するかを決めるということです。これで、多くのアメリカ市民はどちらかに拡散してしまうということが言えます。しかしながら、既にどち

らかの政党を支持している市民は、既に持っている考えを強化する傾向にあるということも彼女は提言しています。ここで重要なのは、既にどちらかの政党を支持している市民にとっては、大統領候補がデイベートでどんな良いことを言うかが、ほとんどの場合投票行動には関係がないということです。

ただ、不用意な発言やふるまいは、大きく中立の市民の投票行動を左右してしまうことがあります。ここで二つの過去の例を紹介しましょう。かつてジェラルド・フォードは一九七六年の大統領デイベートで、「ポーランドはソ連の政治影響下に無い」ともとれるような発言をしてしまいました。それなりに理由は言ったのですが、それでも多くの人はその発言を彼が外交政策に無知である証拠として解釈してしまいました。二〇〇〇年のデイベートで、アル・ゴアは過度に攻撃的になってしまいました。苛立ちを示すような言葉や皮肉を言ったり、ブッシュ候補のスペースに入ってきたりしました。また、ゴアはデイベート・セッションによって着ているスーツの色を変えました。その結果、デイベートの視聴者は「誰だこいつは？」という姿勢で彼を見てしまいました。そして最後に、二〇一二年のデイベートで、オバマは同じような失態を犯すところでした。その選挙では、三回の大統領デイベートがされたのですが、最初のデイベートではオバマはほとん

ど寝ていたのと変わらない感じでした。しかし、三回目のデイベートでは、今度は対抗馬のロムニー候補がその時のトピックであるアメリカの外交政策で、今までのオバマの外交戦略と違いを明確に示すことが出来ませんでした。ですので、オバマと同じくらいロムニーは失態をおかしてしまつて、それが現在の状態へとつながってくるのです。ですので、まとめると、デイベートはその後に着実に意味あるものになっていきます。デイベートはそういう意味で重要です。

現在の大統領選挙は、一般投票の前に予備選挙があります。その予備選挙で行われるデイベートでも、いくつか問題点があります。まず最初に、候補者が複数いるということですが、多い時には十二人もいたことがあります。そこまで候補者が多い状況で、どのようにデイベートを公平にとりおこなうことが出来るのかというのは現時点での問題です。同じ党からの複数の候補がいると、その党のまとまりを阻害することにもなりかねません。予備選挙中のデイベートでは、対立する党はデイベートに参加せず、一言一句登壇する候補の発言を記録します。ですので、後々の一般選挙で対立する党の反論材料を作ってしまうことにもなります。

連邦政府内のデイベート

さて、残りの時間は大統領選挙だけでなく、デイベートの

政治における役割を広く取り上げて話していこうと思います。アメリカ連邦政府は三権分立で、行政、司法、立法という三つの役割を担っています。まず、行政府では、大統領を中心に濃密なデイスカッションが日々行われています。不幸なことに、その議論の詳細は、しばらく経ってから、大統領図書館が公開する資料からしか知り得ません。ですので、私たちがその時の行政機関のディベートに対して出来ることは限られています。

次に、司法機関のディベートについてです。合衆国政府が管轄するのは、九人の判事を抱える最高裁判所 (supreme court) と、下級裁判所 (lower court) です。そこでは、いったん公開審議が終わると、九人の判事は非公開の場で議論をおこない、判決を出すための議論を行います。その議論は基本的に非公開なのですが、一つだけ例外的に公開されるものがあります。それは弁護士が九人の判事に議論を展開する時の内容です。二十分の制限時間で、その時間は厳密に守られていて、その時間内に判事からの質問が自由に行われます。その質問を通じて弁護士と判事が行っているのは、まさにディベートです。

連邦政府の行っている最も面白いものが、三つ目の立法府が行っているものです。合衆国議会では多くの仕事それぞれがその議員のオフィスで行われていて、そこで取り交わされる

資料や議論は私たちには公開されていません。この議論が行われる場所は、今でもクローク (cloak, マント) ルームと呼ばれています——今ではマントを着ている人は誰もいませんけれど。かつてそこではマントをハンガーにかけるだけでなく、議員同士や議員と秘書がその場所に隠れ、話し合いを行っていました。また、公聴会 (committee hearing) が終わり、各議員からの議論が出そろった後には、委員会がマークアップ・セッションと呼ばれる法案修正会議を開いて、議案を通すための修正を行います。

私たちに開かれているのは、立法府の公聴会での議論です。公聴会開催に際しては日時と場所が予め公開され、法案賛成者、反対者、その他の利害関係者が集まり、議論がとり行われます。そこで行われるのは、立会人や証言をデータ (証拠資料) として使いながら行われるディベートです。例えば、一九六七年から一九六八年にかけて、アメリカの都市部では多くの暴動がおこりました。そこで、上院では暴動の原因を公聴会で特定することにしました。メリーランド州ケンブリッジという当時暴動がおこったところの保安官が、立会人として呼ばれました。保守派の上院議員たちは、暴動は共産党系の扇動者がおこしたものだという議論を立証すべく、「保安官Xさん、暴動の参加者の多くはケンブリッジの外から来た人ですよね？」と質問しました。反対に、リベラル派の議員た

ちは——そのうちの一人はエドワード・ケネディだったわけですが——暴動の原因は貧困と差別だと立証すべく、全く違う質問をしました。例えば「ケンブリッジのアフリカ系アメリカ人の生活水準はどんなものでしょうか?」とか「ケンブリッジの学校は、全ての人種の子供たちに開かれていますか?」といったものです。ここで起こっていたのは、保守派とリベラル派のデイベートです。保安官はそれぞれの派閥の議員の真ん中において、尋問への回答がどちらかの派閥のアイディアのサポートとして機能するわけです。このように、公聴会での議論は、大いにデイベットの要素があります。

また、立法院では議会の中でもデイベートが行われます。上院と下院がありますが、それぞれ大きなホールの中で議論を行っています。見ている人によってはすぐにそれがデイベートだと気づかない時もありますが、それは典型的に以下のようなパターンに従って口頭での議論がなされるためでしょう。まず、何かの議題をサポートする党のリーダーの人が、準備してきた原稿に沿ってスピーチを行います。その後、それに反対する党のリーダーの人が、今度はその議題に対して、反対の視点から、同じように準備してきたスピーチを行います。しばしば、補佐官、その議題に関するナンバー・ツールの人物がそれぞれの党において、今度はそれぞれの党の補佐官の人たちがこれまた前もって準備してきたフォローアップの

スピーチを行います。

普通教育デイベートで準備されたスピーチをそのまま読むのは最初のスピーチか、最初の二つのスピーチだけです。その後のスピーチは、全て相手の議論や試合全体への受け答えです。ですので、教育デイベートでは議論のやりとりがなされ、内容は噛み合います。しかし、議会でのデイベートの前半を占めるのは、事前に準備された長い演説です。

しかし、そのあと彼らは即興で相手の議論への反論を行いますので、議論の衝突がそこで起こります。そして、議会のデイベートはその長さにも特徴があります。私は昔、部分出産中絶の議会デイベートを研究したことがあります。六日間、四〇時間以上を要しました。その間のかなりの部分を、ニュー・ハンプシャー州の上院議員とカリフォルニア州の上院議員の二人で議論のやり取りがなされました。カリフォルニア州上院議員の方には少し他の人からの援護が入り、その間何分間か彼女には休みが与えられたのですが、それ以外は二人のやり取りが大半を占めました。このような、二人でのやり取りというのが、議会のデイベートではよく見られます。最近では、テレビチャンネルのC-SPANがこの中継をよくやっています。

さて、このやり取りの結果はどういった部分に見られるでしょうか。まず、市民の投票行動にはほとんど影響しません。

法案が議会にかかった時点で、ほとんどの視聴者が結果どうなるかというのは分かっているからです。それでは、なぜこんなに何時間もかけて議論が交わされるのでしょうか？なぜ彼ら、彼女らは、そこまでやるのでしょうか？そこには、いくつかの理由がありますが、重要なのは、彼らは自分たちの政治的目標のために意見を表明することです。この面白い点は、議員は現時点でのディベートだけではなく、未来に起こり得るディベートの重要な部分を構成しているという点です。先ほどの部分出産中絶の例で言うと、ディベートで負けてしまいそうだった七人の女性議員の全てが、このディベートの議論をもとに、その後起こる女性にとって大事な他の議題の展開をしていきました。ですので、その時に起こっているディベートは今の議題についてどうこうするというよりも、次の議題をどう運ぶかということにより深くかわっています。ここから言えることは、ディベートには意味があるということです。その効果は、その議題そのものというよりも、政治家にとっての次の議題により大きくかわり得るということです。

このような動きは、州議会議員や市長選挙のような州や郡・市レベルでもおなじように言えます。例えば、私の大学のキャンパスでは、去年二人の大学教授がアメリカ下院議会に対立候補として立候補しました。メディアからは大いに注

目され、キャンパス内でディベートも行いました。このように、市、郡、州といった地方のレベルでも、ディベートを大に行い、国政と直接つながることになるケースもあります。

政治ディベートと教育ディベート

さて、ここまでの話がどう教育ディベートとかわかっていくのでしょうか。ここまで、さまざまな形式のディベートが現実世界に存在することを話しました。そして、それは必ずしも教育ディベートの形式には則していないということも話しました。第一肯定側立論、第一否定側立論、反対尋問……というように、きっちり形式だったものではありませんね。

ここで重要なのが、教育ディベートのこの形式は、現実世界のディベートにとって実験室のような役割を果たすということです。もしあなたがコーチとして教育ディベートにかかわる場合、「それは現実世界のディベートではないね」と鼻であしらうようなことはしてはいけません。教育ディベートという実験室で起こり得ることは、現実世界でも起こり得るものだからです。教育ディベートでは戦略が組まれますが、そこでは、新しい議論や戦略が試されるものなのです。実験室というのは、実験が試される場所ですよね。もちろん、全ての実験が成功するわけありませんし、科学実験室で行われる全ての実験が現実世界に反映されるわけがありません。です

ので、基本的な考え方としては、教育ディベートでは様々な考えがその場に出され、その中のいくつかが試合で勝ち、その中のいくつかが現実世界で力や影響力をもち、その中のいくつかが現実世界に反映され、世界を向上させる、ということです。

もしあなたがディベーターだったら、その実験はそれ自体で意義あるもので、その貴重な場に参加しているんだという意識をもつことが大切です。もしあなたが研究者だったら、どの戦略が今教育ディベートで使われていて、それがどのような影響力を持ち得るのかを考えることが重要です。

大統領候補は、私のような研究者に選挙の時に助けを求めます。私の友人のリバティー大学 (Liberty University) のブレット・オードネル (Brett O'Donnell) は昔ジョージ・W・ブッシュ大統領に手紙を送りました。手紙は、ブッシュのディベートスキルがないので、もし雇ってくれるならば助けてあげますよという内容のものでした。結果、オードネルはブッシュに雇われて、ディベートスキルを格段に向上させました。彼は後にマケイン大統領候補にも同じことをしました。ブッシュほど効果的ではなかったようですが、私も、ここで名前を出すことは控えますが、これからある候補に同じようなことをします。ということで、コミュニケーション学者の多くは、効果的に議論を展開する方法や市民にアプローチをする

方法を心得ているので、政治家の助けになることが多いのです。

ということで、様々な議論がなされる教育ディベートという実験室の結果のいくつかを上手く使って、大統領選挙であれ、議会ディベートであれ、現実世界のディベートにより直接的に関与することも可能です。

このように、教育ディベートと現実世界のディベートは、様々なところで深くかかわっています。これらは二つの別の事柄ではなくて、お互いがお互いを必要としており、また高め合うものなのです。片方が実験場で、もう片方がその実験結果の応用や適応です。このような意識をもってディベート活動に取り組んでくれればと思います。

まとめ

この後、聴衆からの質問の時間が設けられた。質問とシエッケルス博士からのコメントを抜粋して、以下に掲載する。

一、「政治家がディベートを学ぼうとする時、教育ディベーターを見学したりするのでしょうか」

伝統的に、そういうことは行われてきませんでした。政治家は、学生のディベーターよりもより多くのことを知っていると考えていますから。講演の中でブレッ

ト・オードネルのことを話しましたが、それは彼の試みがいかにブレークスルーをなし得たかを示唆しています。その後、多くの政治家が教育ディベートに注目していますが、それまでほとんど政治家からの注目は無かったと思います。

二、「ヒラリー・クリントン氏の大統領候補への立候補の可能性についてどう思いますか」

もしヒラリーや、夫の元大統領ビルが間違ったことをしない限り、可能性は高いでしょう。あとは、他の民主党候補の可能性を考えると、ヒラリーは擁立される可能性は十分あると思います。

三、「過去のディベート経験を活かしてキャリア形成に役立つことはよくあることだと思えますが、最近の傾向はどうでしょうか」

この傾向自体はずっと昔から続くものです。全米コミュニケーション学会のウェブサイトを⁽¹⁾見てみると、ディベート経験を経て後のキャリアで成功した人の長い長いリストがあります。ニクソン大統領はその一例です。

そして、ディベートを政治の場に役立てるといふ傾向は昔よりも減ってきているように思います。ただ、その理由は、最近大学生時代にディベートをした八

〇%ほどの学生がすぐに法科大学院に進むからです。もちろん、その後政治家になるという道はあります。なので、今は、ディベートをした後法律関係の仕事をして、その後政治家になるというのが典型的なキャリア形成の過程です。他には、MBAやメディカル・スクールなどに進みますが、ほとんど実務的な方向に流れているというのが現状です。

大学生にディベートを提供する側としては、この傾向は恥ずべきことです。なぜならば、ディベートは常にトップ中のトップの学生の興味を引きつけてきたわけで、政治界に彼らを直接送り込むというのは、アメリカの教育ディベートにとっての一つのステータスだったわけですから。しかしながら、ディベートの経験者が公共に資する仕事に就くという全体の傾向は、まだまだ続いているわけです。

(1) 注

詳細は全米コミュニケーション学会のウェブページを参照。 <http://www.natcom.org/>



司会の田島慎朗先生



講師とイベント 第一部のディベーターを囲んで